

稲の穂先に
かきや
輝きつ
そよ風運ぶ
みの
美りの香り

262 カナダへと
瞬時に届く
メールかな
地球は丸く
掌にあり

263 集まごし
虫も黙しぬ
私睡に
輝き出する
明けの明星

264 白秋の
光のなかに
秋桜を
見詰めておれば
心揺れる

265 秋霖の
過ぎるに
秋の園
一点の露
桔梗咲きおぼり

266 見舞かす
空海の果て
どくまでも
さ迷い往ける
わが憧憬よ

267 見舞かす
山脈はるか
現在も猶
我尋めゆきし
幸 だめり

268 野分ごし
風靡されたる
秋桜の
秋の陽の下
立ち上がりたり

269 辰巳の
肩より覗く
朝日光
剣灘ぞ花
朱鷺に染めゆく

270 エピソッド
ひねもす黙し
彷徨くは
近づく得るや
鹿の心根

271 石路は
小春の光
身に纏ひ
咲き静まりぬ
柿の樹の下

272 月天心
歩む我身に
寄り添える
影の短き
外国の街

273 天狼は
淋しからずや
何故に
かくも孤高に
蒼く輝く

274 睡が門に
寒梅溢れ
待ち兼ねし
冬の出口の
燈灯れり

275 短か日に
小春の緑
輝けり

病癒えたり
いと住きめやも

276 眼閉まなぢ

小春の光
浴びおれば
過ぎ往きし日々
目交に湧く

277 南天なんてん

昂を追つて
疾駆する
我が憧憬は
オリオンのこと

278 悲しむかな

泣くな嘆くな
これこそが
直の人生
私の往く徑

279 小春こはる

小島となりて
故郷に
独り暮しの
母を訪はばや

280 父母ふぼ

在りぬとぞ

故郷は
小春日のこと
現在も慕わし

281 過ぎ去れすぎ

待ち兼ねしかも
東の間の
我が人生は
流れ往く河

282 冬の虹ふゆのにじ

見しと話せし
その人は
少年のこと
睡輝かす

283 萩はぎ

幽けき香り
吹き擡たげ
木枯の果て
我が胸の奥

284 鈴懸すずかけ

枯葉押し上げ
昂指す
水仙のこと
我もありたし

285 室戸むろと

荒磯の嶺の
片陰に
健気に咲きし
小春野茨

286 水雨降るみづあめ

真冬の午後は
花八つ手
寂かにじつと
雨に打たれむ

287 山茶花さんぢあな

咲きこぼれいる
還り徑
我影長く
冬至は近し

288 キャンツアイかんづあい

一日にじつと
移ろくる
青き輝あざき
春の魁

289 年の瀬としのせ

なご想おもひ出でて
故郷は

ちち せなか
父の背中と
はは まなぢし
母の眼差

かがりびはか
※ 篝 火花や
※ シクラメンの和称

290 冬至過ぎ
す ちか
澄める光は

とも さだ
友が差し出す
さるとりばら
猿捕茨

みなせう
水底に
あせのり
青苔の芽は

とうりす
冬至過ぎ
ほくと ねう
北斗の針の

伸びゆきにけり

かたむ
傾きて
きい そ
聴え初めける

291 今日もまた
かて
かくてありけり

はる あしあ
春の足

この命
この命
ふゆの た
冬野に佇てば

ひたに願へり
その永らひを

すはる あゆ
昂は廻る

あき せく
咲き遅れたる
きく くりん
菊一輪

292 華麗に
かれい
凛を加えて

その永らひを

ふゆぼたん
冬牡丹
しろ ひかり
皓き光を

まふゆ
真冬の光

まご さ
纏い咲きおり

さ
射し入りて

293 芯まどむ
こし
凍えし我身

あらわ
現れい出づる
いしんあまた
礫数多

の
伸びしおる
しむがむ
下賀茂の湯や

あたいせんまん
値千金

あつ ひざ
冬の日差しを

294 これこそが

み せい
身に纏い
しめんがね
思案顔なる

399 この朝の
あせ
水の痛きよ

そのかみの
母の靴

おも
想い出でけり

300 霜の朝
しや あま
昇る朝日は

もろいろ
桃色に
ひろ ちゆの
廣き冬野を

そ
染め上げにけり

301 待ち兼ねし
まか
春の兆しか

たか
高まりぬ
くす はす
楠の葉擦れに

すはるこし
昂滲めり

302 やがて来る
ゆき せせ
雪の兆しか

しんしんと
全ての音の

てんす
天に吸われて

303 雑踏に
ちやま
雑踏に

ふと父の背を
みたような
そんな気のした
師走の黄昏

304 過ぎ去れば

束の間なりし
我が命
かすかな光
放ちぬるかや

305 薄ら氷は

朝陽に溶けて
真澄たる
寒の潜水に
滲みて果てり

306 ※妙筆
※白く黒

山河を岐つ
春の雪
心はしのに
澄みゆきにけり

307 大都会
ブルの谷間で

我々は
虹を失い
淋しかりけり

筑波嶺の
優美な裾野
おし隠し
高速架橋

伸びゆきにけり

309 春一番

烈風いたる
駅頭に
私の腕は
拡がらんとす

310 冬天に

傾き極む
白日は
山裾深く
彫り上げにけり

311 天国でも

地球も抱き
今日もまた
地球は廻り
朝は来にけり

312 人類は

盡長でなく
種々の
いのちの残滓
喰らうものなり

313 秋霜も

烈日もまた
受けとめて
いよよ輝く
白菊の花

314 生きる意味

知らで過せし
歳月に
蒂を噛みおる
秋の夕暮

315 歳経りて

苦き想ひは
積れども
やがて醸さむ
慈かな

316 水色の

風となりたや
彼の人の
淡き俤
臆になぞる

317 睡蓮は

遠き昔の
想い出を
運びて来たり
故郷の河